
配達人の憂鬱

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

配達人の憂鬱

【Nコード】

N0678T

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

黒箱配達局の人達を中心とした話です。

前作を読まなくても、読めるようになっていく・・・はずです。

全3話の予定です。

婚活配達人

二十歳をそこそ過ぎると、やがて女子はあるイベントに悩まされる様になる。

「ねえ、サチコはいい人いないの？」

「いるにはいるけど。まだその気じゃないのよね」

その気、とは勿論「結婚」の事だ。

「じゃあ、タマはどうなの？」

「うん、募集中だよお。」

「えー。うっそ！タマに彼氏がないなんて、絶対いると思ってたのに。」

嘘つくくんじゃねえよ、わざとらしいアクションとりやがって。と、心の中で悪態をつきながら、次にやってきたメインディッシュをペロリと平らげた。今この時だって、大学の同級生の結婚式の最中なのだ。テーブルには懐かしい、といっても三、四年くらい会っていないかった同期が円卓を囲んでいる。長谷川珠子は男のメンツを見てがっかりした。職場で出合いの無い彼女には、頑張り所はこんな場面しかないのに、全てがイマイチだった。顔、ルックス、職業もろもろ珠子の中で作られているポードーラインを遥かに下回っていた。

対角線状にいる、珠子にとって「こんな奴いたっけ」程度の男がニヤニヤしながら話しかけてきた。

「長谷川ってさ。クロハコに勤めてるんだろ？」

えっ。

と、彼女の半径二メートル以内の人間は全員声をあげた。

珠子は面倒臭そうに、

「そうだけどお。なんかあんの？」

と、次の皿に手を延ばしている。

「いや、その。大変なのかな・・・と思って。」

クロハコとは、『黒箱配達局』の略だ。珠子は勤めて五年目に入ろうとしていた。

「別にい、他の仕事と大して代わらないんじゃない。」

珠子の言い方が素っ気なかったせいか、男はもう少し彼女の気を引いてみようと話を続けた。

「そんな事ないだろう。例えば、届けた人に恨まれたりしないの？」

「ねえ、金子君。止めなよ。」

珠子の横に座っている友人が、間に入ろうとした。

かねこ？金子という名前か。そういえばゼミが一緒だった気がする。何度かお茶に誘われたが、一度もいったことは無かった。

「あるよお。箱を投げ付けられたりとか、ナイフで刺されそうになった事もあったしい。」

「えっ、ナイフ？」

「そうそう、切り傷程度ですんだけど。」

珠子の言った事は事実だった。

黒箱とは、年に一回だけ恨みを持っている相手に送ることができる、文字通り真っ黒な箱だ。

「お爺さん宛てだったんだけどお、受け取るなり『誰が送ったか教えろ』って怒りだしてえ。それでキッチンからナイフ持って来て脅されたわけ。」

男は青ざめていた。

「な、なんか聞いちゃってゴメンね。」

その言葉が、珠子のスイッチを押してしまった。同僚がこれを『スイッチ』と名付けたのだが、何かのきっかけで押されたスイッチ

は、おっとりとした珠子の話し方を突然、相手を死の淵に追いやるほどの武器へと変貌させる恐ろしい殺人スイッチなのだ。

「別にいい。あんただってヘラヘラ笑ってるけど、一回ぐらい送ったことぐらいあるんでしょ。」

男の笑みが消えた。

そうだ、この男の誘いが途絶えたあと耳にした噂があった。彼は他にも複数の女子に声をかけていたらしいが、その中の一人と付き合う事になったらしい。いや、彼はそう思っていたようだ。相手はただの男友達としか思っていなかったらしく、それに気がついたのは彼女に結婚の相談を持ち込まれた時だったそうだ。

「そ：そんなのあるわけ無いじゃないか。」

「へえ。でも、私だったら自分を傷つけた相手の結婚式になんて行きたくないけどねえ。金子君は優しいんだあ。だって、ずっと付き合ってると思ってたんでしょお？それなのに、よく平気な顔してお祝いできるよねえ。あつ。そっかあ、本気じゃなかったんだあ。」

「・・・んな訳ないだろう。」

乾いた雑巾から水を絞り出すぐらいの、悔しさと怒りの籠った声が男の口から聞こえた。周りの人間はすでに声もかけられないくらいの空気だった。

「俺は、本気だった。いや、本気になったんだ。始めはナンパだったけど・・・でも、あいつはそうじゃなかった。ずっと遊び友達だったんだ。俺が話し掛ける前からずっと付き合ってる奴がいて、『クリスマスは何処にいきたい』とか、『誕生日は何が欲しい』とか、あの言葉は俺に向けられたものじゃなくて、ただ、あいつは参考意見が欲しかったただけなんだよ。それが悔しくて・・・」

送ったのか。

珠子は舌打ちをした。

「あいつに黒箱を送りつけてやっんだよ。ざまあみろ。」

辺りは、しんと静まり返っていた。

「聞こえてたみたいだよお」

珠子が食後のデザートのアイスクリームを食べながら言った。

金色の屏風を背景に、立ち上がってこちらの様子を不安げに伺っている女性がいる。

「金子君、だったんだ。箱を送ったの。」

純白の花嫁衣装が、いつそう悲劇的に映る。

金子は立ち上がって、花嫁を睨み付けた。

「そうだよ、俺が送ったんだ。だから、何だよ？そういう法律があるんだから、別に良いじゃないか。俺は・・・本当におまえの事が」

そこまで言いかけて、男は式場を飛び出して行った。

観客の目は、一斉に珠子のほうへ向けられる。

そこには、食後の珈琲を飲み終えたばかりの満足げな笑みが広がっていた。

二日酔い配達人

三日、三ヶ月、三年。

これは会社をやめる節目になるらしいが、四年目に差し掛かろうとする珠子には関係のない話だった。ただ、言いようのない無気力感が時折小さい彼女の背中に覆いかぶさる。仕事を辞めたいとは思わないが、楽しいとか苦しいといった感情もない。ただ毎日決められた仕事をこなすだけの毎日が無感動に過ごしているのだ。

だが、今日は少し違った。

昨日の二次会の名残が、まだ頭に残っていたからだ。

「うう。死にそう。」

真っ黒な制服に身を包んだものの、更衣室から出るのを嫌がり出勤時間ぎりぎりまでクッションの付いた椅子に座っていたようにする。黒箱配達局の制服は靴下まで徹底された黒一色だ。黒箱制度を批判している人々からは『喪服』、『死神』と皮肉を込めて呼ばれているが、これは普段使っている配達会社等とは異なっていることを、送る人、受取る人に再認識して貰うためだ。

「お家に帰りたいよお。」

子供のように泣きべそをかいても誰も労ってくれない。このまま本当に死んでしまったら、皆悲しんでくれるのだろうか。

「なんや、タマ。二日酔いか？」

虚ろな目だけが、声の主を捕らえた。

ドアを開けたのは珠子と同期の黒崎圭吾だ。

「ちよつとー。ここ女子更衣室だけとお・・・あいたた。」

二日酔いの頭痛を抱える珠子は、痛みに耐え切れずに猫の様に丸まってしまった。

「知ってる。お前がいつまで経っても出てこーへんから様子見に来

たんやんか。言っとくけど、ちゃんと女性陣の許可はもらって開けてるからな。」

黒崎の後で女子社員達が、「じゃあ夕飯楽しみにしてますからね」と、笑いながら立ち去つゆく。

「モテる男はつらいわあ。」

と、手を振りながらそれを見送った。珠子は呆れた様子で黒崎を見つめる。この男のどこがいいんだろう。関西弁が、ポイントを上げているのだろうか。お笑いブームなんてもう、終わったというのに。

「黒崎君、配達人なんか辞めてホストになっちゃえばあ？」

「ホストなあ。悪くはないんやけど、本気になった女子が可哀相やろ。」

この男には敵わないと、珠子はフラフラと立ち上がった。

「わかったわよお、行けばいいんですよ。」

雲の上を歩くような、ファンタジーな足取り。

「うわっ！ お前どこの地方の踊りやねん、それ。」

黒崎のツツコミ（？）にもすっかり慣れてしまった珠子は無視して仕事に向かうことにした。

黒崎とは同期だが、最近関西から移動して来たので、珠子はまだ黒崎の事をよく知らない。確かに女性からモテそうな顔はしている。短髪に切れ長の目、運動神経の良さそうな身のこなしにと冗談混じりの口説き文句。今時流行らないだろう台詞を恥ずかしげもなく言ってしまう所は、顔に免じて許してあげようという気にさせる。その中で珠子は、なぜか黒崎を一度も素敵だなんて思ったことがなかった。

「それで？ 何で今日は黒崎君と一緒に仕事するのよお？」

もはや新米ではない珠子は、いつも一人で仕事をこなしている。ただ今日は朦朧とした頭で仕事内容を確認することは不可能だった。トラックの助手席に座り、バックミラーに貼付けられている紙をデ

コピンした。

「俺が頼んでん。誰でもいいから一人付けてくださいって、そしたらなんでか知らんけど、お前やってん。」

ハンドルを回しながら片手でその紙を剥がし、珠子に渡した。手にした瞬間、「なあるほど」とあくび混じりに納得した。

紙には大きく、『第二項目・規約違反者』と書かれていた。

黒箱は、国民のストレスを軽減するために政府によって作られたシステムであり、国営事業である。

国民は恨みを持っている相手に年に一回だけ黒箱を送る事ができる。これは、要するに国が『人を傷付ける』方法を国民に提示しているのだ。

黒箱システムができたと同時に設立されたのが、黒崎や珠子が働いている黒箱配達局だ。彼等は黒箱を送る人間と受け取る人間を管理し、黒箱を送る以上の物事が起こらないよう『規約』を作っている。

まず、一つ目は

黒箱を受け取った人間は、送り主を突き止めてはいけない。

「そういえばあ。この前のおじいさんってどうなったの？」

「ああ、送り主を教えろってナイフ持って脅してきた人な・・・。」

黒崎は黙ったままだった。

規約違反者は珍しくない。違反者を取り締まるために、配達人とは別に担当の部署があるくらいだ。

二つ目

黒箱は、年に一個しか送れない。
今回の違反者は、この二つ目の規約を破った事になる。

「山村リョウコさん。ま、平凡な名前やな。親戚の名前使って三件の黒箱送ってたらしい。」

「親戚の名前でって事は、伝票上は一回しか送ってない事になってるんでしょ。それって・・・やっぱりバレたらまずいのお？」

黒崎は、その質問を待っていたかの様にニヤリと笑った。

「そやねん。これはな、実は違反してないねん。」

「じゃあ、ダメじゃん。」

「いいや。」

三つ目

配達伝票に記入する内容は、いかなる虚偽も認めない。

「正確に言えば、第三規約違反なんやけどな。」

「伝票にウソ書いちゃダメってやつ？あ、そっかあ。自分の名前じゃないからダメなのかあ。」

「そーゆーこと。」

黒崎が、少し残念そうに「しまった。醤油買うの忘れてた」と呟いた。

「ま、そういう訳で、嚴重注意で終わればいいけど。相手が抵抗した時は『ネコの手も借りたい』くらいやから・・・なあ、タマ。お

前の出番やで。」

珠子の虚ろだった目も、少しずつ焦点が合ってきた。

「まあ、仕事だからあ。嫌とは言えないしい。」

珠子が漫画のキャラクターなら、きつとネコ耳と尻尾が生えているに違いない。それが、にゅつと伸びて三つに割けてクルクルと惑星の様に回りだすだろう。こんなアホな事を考えてしまうのが関西人の性なのだ・・・と黒崎は自分自身に呆れながら、脳が勝手に作り出している映像、文章で表すならば、『彼女のお尻から生えてくる黄色と黒のシマシマの尻尾』を片手で思いっきり掴んで潰した。

「よっしゃ。」

「黒崎君、何ガツツポーズしてるのっ。ちゃんと両手でハンドル持つてよおお！」



管理人いわく、彼女は数年前から、引きこもっているらしい。だから、留守というのは在り得ない、居留守を決め込んでいるのだと嫌味たっぷりと言った。

「あの子、始めは何処かの企業で働いてたらしいんだけどねえ。何て言ってたかなあ。ま、要は人間関係が上手くいかなくて会社を辞めたみたい。それでも三年くらい頑張ったらしいけど、友達が遊びにくる事も無いみたいだし、休みの日に出かけるってのも無かったねえ。だから、お金はあるみたい。だって家賃は払ってんだもん。親が出してくれてるのかもしれないけど、もう三十いてんじやないかな・・・親も困ってるんじゃない、いい年して引きこもりだなんてねえ。こっちが用事があってドアを叩いても、うんともすんと

も言わない。それなのに、あんたら配達人が来たときだけは、すぐに出てきて黒箱を渡してるんだよ。あれは、腹が立ったよ。でも、何回も見たからね、可笑しいと思ったんだよ。いやね、お宅に通報したのは僕なんだけども……」

「ご連絡有難うございます。ですが、すみません。仕事がありますので。」

黒崎は、腐った鯛のような目で、お喋りな管理人から逃げだした。「うるさい、おっさんやな。」

「ちょっと、聞こえちゃうよお。」

くすくす笑う珠子は、大きな荷物を抱えて黒崎の後を付いてゆく。「そういえばあ、これって何なのお。」

「ああ、それはな。『秘密兵器』やねん。」

「秘密兵器い？」

インターフォンを三回鳴らしても、山村リョウコはドアを開けてはくれなかった。

「山村さん。開けてください。いるのは分かってるんですよ。」面倒くさそうに、黒崎がドアを叩く。

「あかんわ、タマ。管理人さんにマスターキー貰ってきて。」

「うん。」

珠子が階段を下りてゆく音が聞こえる。黒崎は、それを見届けた後、珠子が運んできた大きな荷物の封を開けて、何やら準備を始めた。白い箱の中にもう一つ。

それは、真っ黒なダンボール箱だった。

白い箱を折りたたんでいると丁度、珠子が鍵を持って帰ってきた。

「じゃあ、開けるよお。」

がちゃ。

「山村リョウコさん。失礼します、黒箱配達局です。」

返事はなかった。

「タマ、箱もって玄関で待ってろ。」

「わかった。」

黒崎が、部屋の中へ足を踏み入れてゆく。部屋は、まだ昼間だというのにカーテンが閉められ電気がついていいる。その中に、真っ黒な作業着の男が進んでいったが、ある場所になると、ゆっくりと床に膝をついた。

「山村さん。お返事が無かったのですが、管理人さんから、自宅にいらっしゃるといいう事でしたので無理にお邪魔しました。これまでお電話や、ご自宅にも何度か伺いましたが、お返事を頂けなかったで、こんな形でお話しなければいけなくなった事ご理解ください。私、黒箱配達局の黒崎圭吾と申します。」

珠子には、声だけが聞こえてくる。だが、恐らく、そこに山村リョウコは居たのだろう。

「山村さん。今日なぜ私がここにお伺いに来たのか、心当たりがありますよね。」

黒崎の言葉は、始めは丁寧だが徐々に圧迫感が強くなる。彼が、唯のふざけた関西人でないことが、珠子にも分かる。こんな緊迫した状況の中で、彼女は冷静に黒崎が女性にモテる理由を分析していたのだった。

「これは、過去に我々が請けた伝票です。見てください。一枚は山村さん本人の名前とあとの二枚は・・・ご親戚の方ですね。だけど、こうやって横に並べると筆跡が同じに見えませんか？」

「だから、何？」

山村リョウコの声だった。

「あなたは、名前を偽って黒箱を送っていましたね。」

「なにか、それで問題でもあるの。」

棘のある声だったが、黒崎はもう何度かこのパターンを体験しているので怯まない。黒崎のため息が珠子にも聞こえてきた。

「あっさり認めるんですね。これは、規約違反ですよ。黒箱を送れるのは年に一回だけ。ご存知ですよ。それに、伝票に名前を偽ることもいけない事です。」

「誰か、それで困るの。」

「我々が、困ります。」

「何でよ、お金もちゃんと払ってるじゃない。だって箱を貰う相手だって誰が送ったのかわからないでしょ。じゃあ、いいじゃない。何がダメなのよ。」

「山村さん、規約は守って頂かないと。」

「あんたに私の気持ちかわかるの？私だって一個送って気が済めばいいわよ。でも、送りたい相手なんて山ほどいるのよ。今まで、生きてきた中でいつもこいつも私のことを笑ったり馬鹿にしたり・・・ほんっと腹が立つ。それに一回送ったら来年まで待たないといけない、でもそのうちにまた一人憎い相手が増えて・・・もう待てられないじゃない。イライラしてどうしようもないのよ。」

「ほんなら、病院でもいいったらよろしいやん。」

「なんですって。」

「あ、いや。失礼しました・・・とにかく、いけない事です。お手数ですが、ご同行頂けますか。」

「ちょっと、何でよ。何でいかないと行けないのよ。刑事ドラマでもあるまいし。」

「規約を破った方には、罰則が科せられます。貴方にはまず、どのような罰則が適切なのか、カウンセリングを受けてもらうんです。」

「何それ、聞いてないわよ。」

「政府が決めたことですから。さ、我々には無理やりにも貴方を連れてゆく事だって許されているんですよ。」

がしゃん

何かが落ちる音が聞こえた。

山村リヨウコが抵抗しているのだろう。

「黒崎君。大丈夫う？」

珠子が中へ入ろうと一步踏み出す。

「あかん。そこで彼女が逃げ出さんよう止めてー。」

勢いよく、山村リヨウコが走ってくる。思ったより大柄な女性だったので、小さな珠子は「にゃっ」と小動物のような鳴き声を上げた。

「ほら、窮鼠なんたら・・・っていうやろ。」という黒崎の言葉も耳に入らないくらい、珠子は必死でドアにへばりついた。

「そこ、どきなさいよ！」

山村リヨウコが、鬼の形相で玄関に立っている。

玄関には、真っ黒な箱と珠子が間を挟むようにして行く手を塞いでいる。

「むむむ、無理ですう。」

「なによ、カワイ子ぶっちゃって。たいていの女から嫌われるタイプでしょう。私と同じね。」

「一緒にしないで下さい。貴方と違ってちゃんと毎日、眉毛のお手入れしてますからあ。」

「う、うるさいわねっ。こんな時に、どこ見てんのよっ。」

黒崎には理解のできない言い争いだったが、タイミングをねらい山村リヨウコに抱きついた。

「今や！箱、開けてくれ。」

珠子が我にかえて、用意していた箱を開ける。そこに、黒崎が

掴んでいた彼女を放り投げた。

「テープや、テープしてくれ。早く!」

珠子がやっとの思いで真っ黒のガムテープを貼付けると、封をさ
れた箱はしんと静かになった。

珠子と黒崎は黒箱を睨み付ける。

ごと

それは、彼女の最後の抵抗だったのかもしれない。

「な、必殺兵器。役に立ったやろ。」

そして、黒崎が自分に言い聞かせるように、「俺らは、悪くない。
」と短く言いきった。

「黒箱は確かに、仕返しするための方法としてみとめられてる。そ
れが正直、良いもんやなんて思てへん。けど、これにもルールがあ
る。ルールを守れん奴は送る資格なんかない。」

「黒崎君、なんか格好いいね。私、初めてときめいたよお。」

「ふっ。俺に触ると火傷するぜ。」

冗談を言い合いながら、二人で箱を外へ運び出す。トラックに乗
せる所まで行くとお互いの額にうっすらと汗が滲んだ。運転席に落
ち着くと、電子レンジで過熱しすぎた焼売みたいに皺くちやになっ
ていた。

「な。一人やとしんどい仕事やろ?」

「重かったねえ。」

「人間が入ってるからな。そら重いやろ。」

「どうするんだろうね。あの箱。」

「さあ。」

ふと珠子の目が遠くなる。

「あの、お爺さんもこんな感じで連れていかれたのかなあ。」

「俺らは知らんで良い事なんや。」

不安と悲しみの籠った目でミラー越しに、箱を見つめる。あの箱

の中に老人を見ているのかもしれない。

「でもさあ。嫌がらせされたら誰が犯人なのか知りたくなるのって、当然だと思うのお。だって・・・怖くなって誰も信じられなくなっちゃう。」

「俺は知らん方が幸せやと思う。」

「どうして・・・？」

珠子の見つめる黒崎の瞳は、どんよりと重たい空気を作っているようだった。何か言っではいけない事を言ったのではないか、と珠子は次に続く言葉を飲み込んでしまった。

「お前も、知ってるんやろ。あの箱を送ったのは、爺さんが男手一つで育てた、たった一人の娘やってんで。目に入れても痛くない大事な娘が父親に送ってんぞ。わかるか？それを知ってしまったら、爺さんがどんな行動にでるか。」

「でもお。」

「俺らが請け負って来た客の中で、恨みや怒りがあからさま顔に出た奴なんか、ほんのちよっとやった。送られる相手が、まさかこの人と思ってる事の方が多い。そんな体験してしまったら、俺やったら・・・もう誰も信じられへん、いや、もう『始めから信じないで生きていく方がマシやった』って、レベルまで落ちてしまうかもしれない。モヤモヤとしてるのが一番ええって。」

「わかったよお。」

安心した顔でハンドルを黒崎が握る。

「黒崎君はあ、傷つくのが嫌なんですよ。」

頬を膨らませて珠子がラジオをつける。この雰囲気にあまりにもそぐわないアニソンが聞こえてきたので、思わず二人で噴出してしまった。

「おっしやる通りです。お前の方がペチャンコな顔して、よっぱどたくましいわ。」

「誰がペチャンコや！」

「わわわ。やばいやばい。もう少しでスイッチ入れるところやったわ。」

」

スイッチとは、珠子の怒りのスイッチの事だのだが。

「それにしても、あの箱に人が入っちゃうなんてね。」

珠子が笑うと、黒崎が呆れたように。

「タマ、お前忘れてたんか？黒箱のサイズは、人間が入る最低限のサイズやって、研修のときに習ったやろ。」

規約の四つ目。

黒箱は、送られるときに絶対に空でなければいけない。

それは、

この箱は所詮ただの箱で、直接危害を加える物ではないということ。

又は、

人間一人分の『思い』が目に見えないだけで、確かに箱の中に存在するということ。

「忘れちゃったよお。」

珠子は、思い出したように車の窓を開け、頭をおさえた。

配達人の憂鬱

「圭吾君、よー来たな。まあ、遠慮せんと上がって。お茶でも飲んでから行こうや。」

ドアを開けた川村正志は、快く黒崎圭吾を迎えた。
「そしたら、お邪魔します。」

赤いチェックのシャツにジーパン。髪の毛は真っ黒だが、仕事の時よりもワックスで髪を起てているところが休日スタイルなのだろう。

「あっ。」

黒崎は小さく舌打ちした。コンバースのスニーカーを脱ぐと、カラフルな星柄の靴下がどこか彼を幼く見せてしまう。

「何でこんな履いてきたんやろ。」

「何してんの、早く入り。」

恥ずかしげにリビングへと入った黒崎に、黄色い声をあげたのは川村小百合だった。

「圭吾君、久しぶりやねえ。ちよつと痩せたんと違う？」

「そうですか？」

「東京は何でも高いからねえ。」

小百合はその何段かになったお腹を景気良く鳴らした。

「寂しくなったらいつでも来てな。お好み焼き作ったるよ。」

正志が、うんざりした顔で、

「お母さん、そんなんお茶入れてからの方が、ゆっくり話してできるやろ。先にお茶入れて。」

「はいはい。」

パタパタとスリッパの音が遠のく。

しばらくすると、黒崎の背後でヤカンの笛の音が鳴り出した。玉

手箱を開けたようにふんわりと立った湯気が、キッチンからリビングへと迷い現れる。

「ほら、仏壇に供えてた饅頭あったやろ。あれも、持ってきてえな。」

「お父さんが持ってきたら？あんた手え空いてるんやから。」

正志は少しムスツとしたが、「しゃあないなあ」と、のそのそ和室へと向かっていった。

「あんまり良い葉っぱやないけど。」

「お婆ちゃん、ありがとう。」

黒崎は湯呑みを受け取ると、ずずつと茶を啜った。

「おいしいで。」

「よかったわあ。」

二人で笑っているところへ。

「何や、俺のいーへん間に……。俺も混ぜてえな。」

と、正志が割り込んでくる。

テーブルを囲んで三人で笑っている光景は、まるで帰省した息子を迎えた家族の样だった。本当の息子が不在のまま、穴を埋めるように黒崎が代わりにそこに座って居る。

家族でご飯を食べて、笑いあったり、時には喧嘩をしたり。残念ながら、黒崎はカラカラに乾いた干物のような家庭で育ったので、今彼の手の平にある小さくしつとりとして、中にはアンコという名の幸福がぎっしりと詰まった饅頭のような川村家を、黒崎は子供の頃から羨ましいと思っていた。

そして、この夫婦の息子、川村春彦は、黒崎にとって友人であり憧れの存在であった。

「そしたら、腹も膨れたし……。そろそろ行こか。圭吾君。」

「ごちそうさまでした。」

丁寧皿を重ねる様子を、小百合は笑いながら、

「そんな、かしこまらんでも良いのに。」
と、優しく皿を引いた。

黒崎の運転して来た車に川村正史が乗る。

「悪いなあ、休日やのに。」

正史の言葉を黒崎は無視した。返事をするのが面倒だったのだろ
うか。

「圭吾君は、昔からちつとも変わらへんな。」

正史はバックミラー越しに、大人になった運転席の青年を見つめ
ていた。

『第二倉庫』と書かれた建物は、入口に警備員が一人、寂しい景
色だった。

黒崎が門の前で車を停めると、警備員が近寄って来たので窓を開
けた。

「ご苦勞様です。受取人です。」

黒崎の言葉に、警備員は表情を変える事なく、

「身分証明書を拝見します。」

と答えた。

横から正史が、

「免許証でかまへんかな？受取人の父親で、代理で来たんやけど。」

ポケットから取り出した免許証を確認した警備員は、短く「どう
ぞ」とだけ答えて門を開ける。

「右から三番目です。」

「ありがとう。」

門をくぐると、幾つか小さな倉庫が並んでいるのが見える。海岸
でよく見る景色に似ていた。

「なあなあ、圭吾君。どんな人が、此処にくんの？」

「政治家とか社長さんとか、何かしら恨まれる様な事をした人ですね。テレビとか出る人が特に多いかなあ。まあ、僕はここの担当じゃないんであんまり詳しくないし。」

「ふうん。ほんなら会ったらサインもらわなあかな。」

「おじさん怒られますよ、そんなん。ただの嫌味やないですか。」

警備員に貰った鍵で倉庫の扉を開けると、外観からは想像できないくらい狭い部屋が二人を待っていた。真っ黒な壁。天井は高く、外の光が無ければ、ただの真っ黒な闇の中にいるようだ。

「早いなあ。もう、こんなに溜まってしまったんか。」

「大阪に住んでるときの住所で送られたのは、全部『所在不明』で返してるはずなんですけどね。」

「そしたら、これ全部新しい住所で送られて来てるんか・・・あああ。早いなあ。また引越さなアカンわあ。」

正史が壁に手をつくとき、ぐらりと壁が動いた。

「おっと。」

「おじさん、気をつけてください。崩れたらエライことになりますから。」

壁だと思われていた物は、真っ黒な段ボール箱。つまり、倉庫の中は黒箱で埋めつくされていたのだ。倉庫の大きさからして、天井まで積み上げられた黒箱の数は、五百は越えるだろう。

「それにしても、暇な人らやなあ。僕、こんな数の人間と知り合いと違うで。」

「テレビのニュース見て送る人やと思いますよ。そんなお客さん、よーいてはるんです・・・やっぱり知り合いに送るのは、いくら憎くても気が引ける。せやけど本当に悪い事した人間にやったら、送られた方も貰って仕方が無いと思うんちゃうか・・・ってね。知り合いやないから、誰が送ったかなんて足もつかんし。」

「じゃあ、その憎い相手の代わりに、送られてくるんか・・・僕らは？」

「全部とは言いませんけど、中には・・・そういう人もいます。」
「ふうん。」

正史は呆れたように返事をした。見慣れてしまった黒箱の壁を、そつと撫でる。

「送られても仕方がない人間、か。・・・そんな奴、ホンマにこの世の中にいるんやろか。」

黒崎は答えなかった。正史は箱の間の細い隙間、暗い闇の中のそのまた向こうを見ているような遠い目で、聞こえはズがない答えを待っているようだった。

「この世の中、本当に悪い人間は、一体何処にいてるんやろか。」

二人は黙ったまま、倉庫を後にした。

「また、次の裁判が始まったら増えそうやな。」

「そうですねえ。」

「春彦が『あれ』を見ることが無いのが救いや。」

「ええ。」

「そやけど、最近はネットで住所とか流れるんやろ？ホンマ狭い世の中になったもんやなあ。」

「そうですねえ。」

「黒崎君、僕の話聞いてたか？」

「えっ、ちゃんと聞いてますよ・・・いやあ。おばちゃんのお好み焼き食べたいなあ、なんてちよつと思っちゃいましたけど。」

正志が携帯を取り出し、ふふつと笑った。

「ほんなら、うち寄って帰りたいな。お母さんに電話するわ。」

「わっ、うれしいなあ。楽しみや。」

正志は小さな声で、「そういう所も、あんまり変わってへんなあ」と苦笑した。



部屋の真ん中に置かれた透明のガラスは、休む事なく空間と空間とを分割する役割を果たしている。

片方側には男が一人、じっと座って相手が来るのを待っていた。

隔てられた空間の反対側にあるドアが開いて、その相手が現れると、

「ひさしぶりやな」と男は片手を上げて迎えた。

「ひさしぶり。東京勤務になったんだってな。」

「うん。」

二人は小学校からの付き合いで、高校が別れてからもよく家に遊びにいつては、たわいもない話をしたものだった。ガラスごしではあったが、しばらく思い出話に花を咲かせた。

「こないだ、おぼちゃんのお好み焼き、ご馳走になってん。」

「そっか。」

「二人とも元気やで。こっちでもやっていけるんちゃうかな。」

「この前、俺に会いに来たわ・・・親父。」

「・・・そう。」

男は、相手が非常に穏やかな様子なのに、ふと、不安になった。

「箱、届いてるんだろ？」

「ん」。まあ、ぼちぼちな。」

男が返事に困っていると。聞こえるか聞こえないくらいの、短い

笑い声がガラスを透して男の耳に入ってきた。

「春彦。俺なんか変な事言ったか？」

眉を寄せる男に対して彼は腕を延ばして、まるでリゾート地であつろいでいる様だった。

「いや。減らないんだな、と思つてさ。」

「何が言いたいんや。」

今度は、はっきりと彼の笑い声が聞きとれた。

「いい気味だ。」

一瞬、黒崎は友人の言葉の意味を理解できなかった。間をおいて「へ？」と答えた時には、春彦は元の気の弱そうな情けない顔に戻つていた。

「お前が無実やって、俺も、おっちゃんも、おばちゃんも皆信じてるで。」

春彦が、ガラスにピタリと手をついた。

「なあなあ、黒崎。お前だけに聞いて欲しいことがあるんだ。」

「何？」

「俺達、友達だよな。」

「ああ。」

黒崎も、話を聞こうと体を寄せる。

「何やねん。早よう言いや。」

「俺の言うことを、信じて欲しいんだ。」

黒崎は呆れたように。

「もちろん、俺も信じてんで。だって、お前があんな事出来るわけ

がないやんか。お前は自分から本当の事を言ってくれへんけど、昔から知ってる俺が言うんやから間違いない。お前がした事やとしても、誰かに脅されてやった事なんやろ。」

「そうじゃない。」

くっくっ・・・と喉の奥から出る笑い声は、決して良い気分にはさせてくれない。春彦の穏やかな顔は黒崎の思い出をゆっくりと傷つけてゆく。

「俺がやったんだよ。」

「だから、それは。」

「俺は、俺の意志でやったんだよ。」

春彦が遮るように冷たい言葉を言い放った。二人を挟むガラスの様に冷たく突き刺さる言葉だった。

「何あほなこと言ってるねん。なんで、そんなウソ言うんや。」

「ウソじゃねえよ。俺はな、黒崎。お前がずっと羨ましかった。友達が多くて、喧嘩も強くて、俺は、いつもお前の後ろにいる影みたいなもの・・・いや、オマケだった。一人で何もできない無力な男なんだよ。だから、強い奴の側にいる。そうしてずっと弱い事がばれない様に生きてきたんだ。虐められるのが怖かったんだよ。だから、お前と友達だった。」

黒崎が、じっと春彦を見つめる。

その春彦は、黒崎を勝ち誇ったような目で見つめた。

「だけど、今はもう弱い人間じゃない。俺は、俺の意思で何でもできる。そう、何でもできるんだ。」

「何でも。が、それかい。」

長年の親友は、ガラスを強く叩いた。

「おっちゃん、おばちゃんは、お前の事ずっと信じて待ってるんや。それを、お前は・・・。」

「アイツ達は、俺の事を何も分かってないんだよ。何も・・・。何

も気づいてくれない無能な人たちだった。それが親なのかな？ 本当に親なんかなあ、黒崎。」

椅子の倒れる音がした。

看守が黒崎を取り押さえる。

「お前、それ。本気で言ってるのかっ。」

春彦は動かない。

「俺が、どんなにお前の家に憧れたか。あんな、楽しそうに笑って・・何が・・何が、不満やったんやっ。お前が見るはずの黒箱を、あんなに沢山の箱を、おっちゃんがどんな気持ちで見てるんか、お前に分かるんか。お前の変わりに、おっちゃんはずっと箱を受け取ってるんやぞ。」

「でも、ただの箱なんだろ。」

黒崎の顔が凍りついた。

「春彦・・お前。」

「何百か、何千か知らないけど。ただの箱なんだろ。それだけじゃないか。」

春彦の瞳は、黒崎さへも見ていなかった。

何処か、遠い記憶の中を彷徨っているようにも見える。

「どうしてなんだよ、黒崎。お前は、俺の事わかってくれると思ってたのにな。」

◆
「もしもし。」

受話器の向こうで、懐かしい言葉が聞こえる。

『アンタ、元気でやってるん？お母さん心配やわ。家出て行ったり、一回も帰って来んと。』

「そんなん。本当は思っていないんやろ。いつも口だけやねん、オカンは。」

『お父さんも、口には出さんけど、心配してるんよ。』

「俺がいなくてスツキリしてるんちゃうの。」

『あの人やって、寂しいんよ。』

「へえ。」

『どうしたんよ。圭吾、寂しくなったんか？』

「まさか。」

黒崎は笑った。

「何となく、電話しただけやねん。」

『新聞見たよ。』

「そうか。」

『残念やったね。』

黒崎の部屋は電気がまだ付けられていなかった。帰ってきたばかりで、玄関に腰を下ろしたまま、じっと黒の闇の中に溶け込んでいる。

「家を出てったんは、今も後悔してへん。」

母親のため息が聞こえた。

『アンタは、家のことを「アジの干物みたいな家」やて、言ったことあったけど。』

「よう、覚えてたな。」

『この間テレビで見たけど、何やどっかの地方では、アジの干物をから揚げにして食べんねんで。そうすると美味しいらしいで。』

「はい？」

『アンタが、どういう意味でそう言ったんか。私もお父さんも未だによう分からん。せやけど、私らやって何も百パーセントの自信をもってアンタを育てられた訳でもないから、その言葉を否定も出来へんし、その前に意味が分からんし。まあ、えっか。それならそれで良いやない、と開き直ってみたんよ。』

「そうか。」

『あんたが、私らにそう言ってくれた事が大事やと思ったんよ。』

チャイムの音が聞こえた。

『お父さん、帰ってきたわ。また電話しといで。』

一方的に切られた電話を黒崎はポケットに入れた。

むっくりと起き上がる様子は、どこか死神を連想させる。

真っ黒な服。

真っ黒の闇。

「言ってれば、アイツも何か変わったんやろか。」

狭いアパートの部屋が、あの倉庫の様にみえる。

体を小さくしてベットに横たわる。

「何も怖くない。何があっても、俺は俺であり続けなあかんねん。」

布団を被ると、呪文のように何度も何度も同じ言葉を呟いていた。

ブラボー君について（前書き）

三話の予定でしたが、最後は楽しい方がいかなと思い、四話完結になりました。

ブラボー君について

ブラヴォー

観客・聴衆などが賞賛の意を込めて発する感嘆詞。

「ねえ、これって。一般公募できまつたんだよね。」

長谷川珠子が、指に引っ掛けてブンブン振り回しているストラップは、最近作られた『黒箱配達局』のマスコットキャラクター『ブラボー君』だ。

「あんまり、勢いよくまわすと飛んでいくから気をつけろよ。」
隣に座っているのは、長沼という男だ。

「ええなあ。俺もそれ欲しいねん。甥っ子が欲しいって言っててな。」

その隣にるのが黒崎という配達人。

「今、Aランチにご飯大盛りにしたら、おばちゃんがおマケしてくれたのお。オークション出したら売れるかなあ。」

「えっ。お前、大盛りとかすんの。そんなんやから何時までたっても男がよってこーへんのんちゃうか。」

「てか、タマ。もらい物をオークションに出すのか？」

「もお本気じゃありませんよお、先輩。てか、黒崎ムカツク。」

黒い箱から手足が生えて、丸い目が二つ。

「なんか、昔のアニメでみた気がするなあ。」

「一般公募といっても募集対象が子供だけでしたよね。きっと、ポケモンとかの影響ちゃいますか。」

珠子の指から高速回転したブラボー君がすり抜けて、黒崎の顔に激突した。

「い……いった。」

「ああ、ごめんねえ。」

反省のかけらもない謝罪を、殺意の籠った目でにらみつけた後、食堂で頼んだきつねうどんを無言で片付けはじめた。長沼が、冷たい空気をなんとかしようと、

「しかし、子供がよく考えたよなあ。ブラボー君なんて。」

「ブラックボックスを縮めてるんですよねえ。親の入れ知恵じゃなければいいですけどねえ。」

「ブラボーってのが、嫌味だよな。」

「楽しくっていいじゃないですかあ。」

どん

井が割れる勢いで机に叩きつけられた。

「ありえへん。」

珠子が、井を覗き込んだ。

「何があ。」

「このダシありえへん。」

「えっ。」

「おかしいと、思ってたな。」

長沼が、黒崎の頭を叩いた。

「何が、『ありえへん』だ。いい加減なれろよ、こっちはダシが関西より濃いんだよ。大体いつまで東京の悪口言ってるんだ。文句があるなら大坂に帰れよ。」

「でも・・・ちよっと濃すぎて。スープ飲めへんし。」

子供の様にすねた黒崎の前に、珠子がそっとブラボー君を置いた。「これ、あげるから元気だしなよお。なんなら、それ私が飲んであげるよお。」

その言葉で、一気に女子社員の刺さるような視線を感じた長沼は、「俺が飲んでやるよ」と前にでてきた。

「いや、残せばいいんですから。」

冷静な答えを出した黒崎は、とても残念そうに箸を置いた。すつと引いた視線に安堵した長沼は、珠子の頭も叩いた。

「なんですかあ。先輩。」

「タマ。男兄弟に囲まれて育ったんだよな。」

「それが、何かあ？」

「いや、分からなければいいんだ。」

食堂のテレビが、聞き覚えのある音楽を流す。

ブラッポー

ブラッポー

ブラブラ・ブラッポー

(ヤホー)

ブラッポー

ブラッポー

ブラブラ・ブラッポー

(ヤホー)

「これ、頭痛くなんねんな。」

「私もお。」

「ま、CMだけでも楽しくて良いじゃないか。」

「そおですね。」

珠子が食べ終えた食器をもって立ち上がる。

「じゃあ、お先に行きますねえ。」

「おお。」

「俺も、そろそろ。」

黒崎が大事そうにブラボー君をポケットにしまう。

「黒崎。お前、甥っ子なんていないんだろ。」

「えっ。」

長沼が笑う。

黒崎が恥ずかしそうに。

「ブラボー君は八種類あるんです。タマの持ってるのだけ、手に入らなくて……。」

「よかったな。」

長沼が喫煙室に向かう。

珠子が先に座っていた。

「どうでしたあ。私、女優になれますよねえ。」

「うんうん。そうだな。」

「本気で言ってくださいよお。」

「なんか、アイツ元気なかったもんな。」

笑う二人に気づくはずも無く、黒崎はロッカーにブラボー君を丁寧に納めた。

「よっしゃ。コンプリートや。」

不意に携帯が鳴る。メールを読んだ黒崎は、獲物を見つけた肉食動物のような笑みを浮かべた。名前の先には赤いリンゴの絵文字が付いている。それは、黒崎のお気に入り女子に付けられた印だった。

「楽しくなってきたな。」

スキップしながらドアを開ける時には、少しだけ影が小さくなっているような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678t/>

配達人の憂鬱

2011年5月28日01時40分発行